

生徒と学級担任

目次

座談会／中学生にとっての学級担任	2
要約	12
第1章 調査の概要	14
1. 生徒たちのプロフィール	15
2. 担任と生徒たち	19
第2章 担任への満足度	30
1. 担任と満足度	30
2. 担任への満足度の差異	33
3. 担任への満足度を規定するもの	35
第3章 上位群と下位群のクラスの差を求めて	46
1. 上位群と下位群の担任と生徒たち	46
2. 生徒たちの担任評価	51
3. クラス集団の差異	56
4. 担任への信頼	59
第4章 まとめに代えて	62
資料1 調査票見本	65
資料2 学年・性別集計表	74

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

座談会

中学生にとっての 学級担任

進行／深谷昌志氏（静岡大学教授）

出席／永井聖二氏（群馬県立女子大学教授）

田中統治氏（筑波大学助教授）

シビアになる中学生の教師評価

深谷 今回の『モノグラフ・中学生の世界』では、「子どもにとっての先生」というテーマで調査を行いました。ところがその結果だけを見ても、先生方にとってはかなり厳しい数字が並んでおりまして、その数字をご紹介しただけでは学級担任の実像をお伝えするには不十分かという思いがいたしました。そこで今日は、教師について幅広くご研究をなさっている永井先生と、学校のカリキュラムなどについて詳しい田中先生においでいただき、こうしたデータをどう考えていったらいいかということをお話し合いたいと存じます。

今回のサンプルは、31クラスの中学生に、担任の先生の評価をお聞きしましたが、このような調査にご協力いただいた先生方は、先生として、学級経営とか学級集団について、いろいろな意味で造詣が深く、また教え方などについてもしっかりとしたものをお持ちだ

と思います。しかし、そのような先生が受け持たれているクラスでも、結果によると大雑把に言って3分の1くらいのクラスで中学生の担任の先生に対する満足度は3割以下なのです。

前に『モノグラフ・小学生ナウ』でも同じバージョンの調査を実施いたしました。小学生の場合は担任への満足度はだいたい6割でした。つまり小学校と比較すると、今回の中学校の担任の先生に対する支持率は、非常に低いという結果でした。そこでまず、この辺をどうお感じになるかおうかがいしたいのですが……。

田中 発達水準といいますが、これは小学校のデータでも出てきているのですが、高学年になりますと担任の先生に対する評価がシビアになってくるということなのです。それが中学生になりますと、さらに一層厳しい見方になってくる。これは生徒の目が肥えてくるといいますが、多面的な見方ができるということの1つの現れではないかと思います。

もう1つは、中学校では教科担任制になり

ますので、それまでの学級担任制と違って、違った授業の中でいろいろな教師を比較しているのです。つまり中学生の発達段階と、中学校という学校のシステムが絡み合っているのではないのでしょうか。

永井 確かに田中先生がおっしゃるように、発達段階の問題があると思います。そしてそれは、年齢が上がれば教師への評価は下がるのがふつうだという問題だけではなくて、子どもたちが持っている教師に対する評価の基準が、小学生の場合と中学生の場合とでは変わってきているのではないかということでもあるでしょう。その辺りにこのデータを見るカギがあるのかなという気がするのです。

深谷 発達段階に比例して、担任への支持率が下がるということは、例えば高校になったらもっと下がるということでしょうか。

田中 今回のデータを見て気がつくことは、「どちらともいえない」という評価がかなりあるということです。これは生徒から見ると、担任はダメだというよりも、むしろいろいろな見方ができると受け止めるべきだと思うのです。つまり、必ずしも発達段階に比例して支持率が下がるとは言い切れないのではないのでしょうか。ですから高校生になると、支持率が激減するという感じは持っていません。

深谷 小学生から中学生になるにしたがってニュートラルといいですか、「悪いともいえないけれど、いいともいえない」という層が増えてくるということですか。

永井 ご指摘の通りだと思います。

深谷 つまり、今回の数字をご覧になって、まあこの程度かなというものですか。

永井 むしろ小学生のデータと同じ支持率が出たら奇異に感じたでしょうが、まあ、予想の範囲の数字かなという気がします。

深谷 つまり、今回の中学生たちの声は、担任の先生をかなりきちんと見ているという…。

田中 おとなや教師の水準から考えると、それはあくまでカギかっつきの評価とみたほうがよいと思います。

永井 生徒の評価をどのくらい信頼できるの

かということについてですが、その評価のデータを見たときに、それが学校の中のどのような状況で、あるいは生徒と教師のどんな関係の中で出てきた数字なのかということが重要だと思います。数字が低いということはそれはそれとして受け止めなければならないのですが、なぜ低い数字が出てきたのかを検討することがより大事なのではないでしょうか。

数字の背景を考える

深谷 ところがこうした調査は、お願いする段階で拒否される確率が高いんです。例えば小学校の場合でいいますと、「先生が好きですか」という1項目があっただけで調査全体がアウトになってしまいます。その点について、どう思われますか。

田中 教師が防衛的になることは理解できません。ただ、そうしたデータを自らが向上していく手段の1つとして活用していく、つまりなぜ低いデータが出てきたのか、その背景を考えることが必要ではないかと思います。

永井 最近では大学でも学生の授業評価を積極的に取り上げる方向に進んでいますが、教師の側からは、学生の評価は額面どおりには受け入れられないという声も多い。しかし、数字だけ一人歩きされてはたまらないという論理にばかりこだわらないで、どういう授業だったら学生がどのような評価をするのかということをもっと検討していくことが大事だと思います。

田中 評価はパーソナルな面と授業の面と区別して考えてみた方がいいと思うのですが、これがわりと一体になっている部分がある。例えば教室において評価の高い先生とは、ユーモラスな授業を展開し、生徒にセンシティブに反応できる、そして技術のレベルの問題ではなく聞いている側の状況をよくみようという心理的な余裕といいですか、人間的なスキルを持った先生ではないかと思います。しかし、授業面とパーソナルな面とが一体であるがゆえに、授業評価

永井聖二氏



とはいいながらも実は教師の人格評価・勤務評価につながるという危惧につながりかねないのではないのでしょうか。

深谷 大学でいえば、出欠をあまりうるさく言わないで単位をどんどん出す教授は評判がいい。逆に本気になって授業しようとして単位を厳しくつけていくと、評価は辛くなっていく。ですから学生の評価はいい加減ではないかというのは一方では納得できますね。しかし、もう一方では学生はよく見ているという声も否定できない。学生評価はアメリカあたりではかなり盛んなようですが、筑波大学ではどうですか。

田中 学生からの評価と教員の教育業績評価とのモデルをどうつくれるかという研究をはじめようとしています。

深谷 学生評価といえば、一番極端なのは予備校ですね。生徒の評価によって、給料をはじめ何から何まで全部変わってくる。あそこまでくると教師に危機感はないのだろうかという気もしますが……。ところで中学生くらいというのは、小学生と比べると教師と子どもの関係というのは相対化されていてかわわないのですか。

田中 教科担任制の中でいろんな教師を見ているので、生徒側からみれば、この先生はどこまで生徒の要求を通してくれるかということなどを常に試しているのではないかと思います。あるいは先生のパワーというか、状況をコントロールする力を見極めようとしている。そういう意味で相対化していると思います。

深谷 永井先生にお聞きしますが、教師論の中で子どもの学年によって教師評価がどう変わるかという研究はあるんですか。

永井 あまり聞いたことはないですね。ですから、この調査は大変貴重なデータではないでしょうか。

深谷 個人的なお考えで結構ですが、小学校と中学校の担任評価はどの辺が変わると思いますか。田中先生は教科担任と専科が相対的に見えるとおっしゃっていますが。

永井 確かに相対的に見られるということはあるわけですが、それとともに教師のストラテジーの裏が見えるという部分もあるわけです。つまり小学生の低学年であれば、こう言えば先生は僕のことを思ってくれているんだと素直に考えられる。しかし、中学生になると、教師の言葉の裏がわかってしまうので、先生は私のことを考えてくれているというふうには素直に捉えてはくれない。それはある意味で当たり前で、数字が低いというのはそんなに問題ではないと思います。

生徒が求めるのは個別のケアー

深谷 支持率が97%という高い先生から、極端に言えば0%の先生がいる。こうした高い低いに分かれ目は何だと思えますか。

永井 私自身、生徒の教師に対する評価が低いクラスについて知りたいと思っています。つまり担任の先生が、一生懸命教えようとして悪戦苦闘しているのに、生徒の側はしめつけが強いと感じて評価が低いのか。それとも単純に反発されているだけなのか。ここが一番知りたいところです。

田中 先生のしめつけによって生徒の反発が強く、そのために評価が低くなるのか、これはもう少し調べてみる必要があると思います。というのは例えば、いじめに対して先生が助けてくれたことがあるかについて「ぜんぜんない」が87%もある。この辺の評価が気になったのですが、案外そういうところに、逆に教師にもっと厳しくやってほしいと期待する面がある

のではないかという気がするのです。

深谷 データの中に、評価の高かったクラスと低かったクラス、それぞれ3クラスを比較したものがあつたのですが、上位の1つは先生がほめてくれた、もう1つは悩みの相談にのってくれた、それから物がなくなつたときに一緒にさがしてくれたというのが特徴的なんです。逆に下位のクラスに特徴的なのは、1つには先生が約束を破つたということ、2つには先生から無視されたということ、それから先生から傷つくようなことを言われたということがあげられています。この中には教え方が入っていない。つまりすべて人間的な要素だと思つていますが、その点どう思つますか。

田中 これは授業の過程で生徒が、ほめられた、傷つけられたという経験を持ったということだと思つます。だから、教師の授業の技術や進め方のスタイルが評価に含まれていると思つれます。

永井 今の中学生が教師に求めているものは一斉に指導するスタイルではなくて、例えば困つたときに共に悩んでくれる、あるいは物がなくなつたとき一緒にさがしてくれるというような個別のケアだと思つます。これは教師の側でこれまで受け継がれてきた教え方や生徒に接するスタイルと、今の子どもたちが教師に求めているものが微妙にずれてきているということです。したがつて、生徒側の希望を代弁すると、もう少し個人的な人間関係的な要素で引張つていってほしいということではないでしょうか。

深谷 このデータは小学校のデータとほとんど同じですね。つまり小学生も声をかけてくれる先生が大好きなんです。キメ細かに対応してくれる、人間性みたいなものを基準に評価がなされているということでしょうか。

田中 小学生、大学生を問わず同じだと思つます。

深谷 教員養成の歴史から考えたら、5段階教授法以後、集団として教えるシステムを開発してきましたね。教育学部などでやっている指導案なども基本的には集団の指導です。



田中 統治 氏

その意味で今の先生方は個別の指導に慣れていないのではないですか。

永井 今や教育界の主流に受け継がれてきた教え方や、生徒に対する接し方というのは評判がよくないのです。また教師の教育力の源泉のようなものを考えたときに、制度的な力もかなり薄れてきていますし、専門的な力もむずかしさがあるということで、結局は人間関係的な力で引張つていく教師が求められてくるというの、ある意味では今日の状況からいけば当然だという気がするのです。しかし、多くの教師は、個別の指導に慣れ親しんでいない。しかもまだ、学校の仕組み全体に伝統的なものが色濃く存在していますから、その辺りはむずかしいのでしょうか。

深谷 制度的な力が衰えているとおっしゃいましたが、それはどういう意味ですか。

永井 先生であるがゆえにともかくも先生に対する対応はきちんとしましょうという意識の問題もありますし、もう1つは、例えばいかなる場面においても体罰は許されないという意味でも、教育力が薄れてきたという傾向があるんです。そういう中で教師に残された武器というのは、人間的な魅力を磨いていくということだと思つます。

個々の生徒の状況を把握すること

深谷 個別指導と集団指導について、田中先生はどうお考えですか。

田中 永井先生たちが調査なさつた「教師の

深谷昌志氏



指導力」(『モノグラフ・中学生の世界』Vol.47)をみても、日本の場合、先生たちの間には学級経営を重視していくというスタイルが伝統的に強いですね。子どもの方は集団として動かされるというシステムに対して疑問を持ちはじめています。ですからパーソナルな接し方がうまい先生が人気が高いという結果が出てくるのだと思います。先生方もその辺は感じていらっしゃるって、カウンセリング・マインドを勉強したいという先生方が増えてきていますね。

もう1つ言いますと、パーソナリティーの人気というのは、ある意味で教師のパワーの源泉になっていることがあるのではないかと思います。昔は地位とか権威にパワーの源泉があったように思います。この点は先生方もそれを敏感に察知されているので、生徒の人気に反応せざるを得ない事態になっている。つまり人間的で、気軽に話せてという教師像への転換が今起こりつつあると思います。

深谷 『モノグラフ』Vol.47では、先生のコントロール力みたいなものを問題にしましたね。永井先生、あの場合は学級集団を考えていたのですか、個別を考えていたのですか。

永井 両方です。ただし、教師の方は集団的コントロールを重視する。それによって集団を構成する子どもを動かすというスタイルを圧倒的に支持するわけです。例えば、クラスサイズがもっと小さくなった方がいいという意見に対して賛成する教師はそれほど多くはないんです。つまり、個別的に接していくと

いうスタイルを求めなければ、野球チームがクラスの中にできるくらいのサイズはあった方がやりやすいというのが現実の教師の意向なんだということです。ところが今回のデータをみると、子どもの方はもっとパーソナルなものを教師の力の源泉としてみているのかなということになります。

深谷 永井先生にとっても大事なことをおっしゃっていただいたと思います。つまり、今までは、教えるという先生の側からのみ、子どもを見ていた。集団として子どもを見ていたわけです。ところが、子どもの方は個別に見てほしいという。そこにはかなりのズレがあるわけですね。田中先生は以前、愛知教育大学においでのとときに、かなりたくさんの方の学校をご覧になっているとお聞きしましたが、中学校段階で個別に子どもたちをみつめるというのは可能だと思いますか。

田中 心を開いてくれるところまで接近するのは、まずむずかしいと思いますね。いきなり「何か悩みがないか」といってもダメなんで、「少し元気ないようだね」と言って声をかけることが大事なんです。つまり生徒は、親身になってくれているなという感触を確かめながら徐々に心を開いていくのです。ですから個々の生徒の状況を把握することが大事だと思います。

永井 どういう方向にいくのかということのはなかなかむずかしいと思いますが、社会全体が変わってきていて、子どもの様子も変わってきている。そのことを前提にして教師が生徒に接するときどういう影響力の行使のスタイルがとれるかということを検討する必要があります。ただ、満足感と集団の達成の問題は、違う面もあると思います。

個別化と進度の問題

深谷 今回のデータで目につくのは、先生の評価の低いクラスで、クラスの満足感が高いクラスがあるということです。小学生の調査結果では、先生への満足感とクラスへの満足

感が並行していました。つまり先生を抜きにしてクラスはありえなかったけれども、中学生の場合は、先生を抜きにして自分たちは楽しもうという。これは中学生らしくてとてもいいと思ったのですが。

田中 そこが一体化してこないところに、むしろ中学生の特徴があると思います。一番高い例が先生への満足度が25%で、クラスの満足度が86%ですね。

深谷 理想の教師論からいったら、集団ではなく個別へいった方がいいという意見もありますが、集団にとめておいた方がいいという感じですか。

永井 そこはむずかしいのですが、従来のような集団を動かすことによって構成員を動かしていくというスタイルだけでは通用しなくなっていることは確かでしょう。ただ、全く個別的なものがいいのか、それとも今までの日本の伝統的なスタイルを守っていきながらそこに個別的な要素を加味していった方がいいのか、もっとドラスチックに個別的なものを志向せざるをえないのか、そのところは私自身もはっきりしていないのです。

田中 学校はどうしても集団になってしまうので、集団を動かす力がないと無秩序になってしまう。しかし一方で、生徒は自分に注目してくれているという眼差しを求めている。生徒理解という言葉がありますが、子どもが置かれている状況にもっとセンシティブに反応できることが、これからの教師には求められていると思います。

永井 言い換えれば、仮に同じように集団を通して影響力を及ぼしていくとしても、今までは一人一人の子どもへの眼差しが問われなくても集団を動かすことが可能だったということです。しかし今は、集団を動かすにしても一人一人への眼差しがなければ不可能だということをはっきり言えると思います。その意味でこれから求められる教師像というのは、一人一人の子どもの様子に、田中先生の言葉を借りればセンシティブに反応できることが求められているといえるでしょう。ただその

ことが集団的なコントロールを無視するというのではないと思います。

田中 先ほど、時代の転換ということをおっしゃいましたが、日本の教師は戦後、生徒を平等に扱うということに1つの価値をおいてきた面があるのではないのでしょうか。そうではなくて、今まで「えこひいきはダメ」という考えが見過ごしてきた側面をもう一度見直してみる必要があるのではないかと思います。いかがでしょうか。

深谷 今回のデータを見ていて、対極にあるのがアメリカとか、オーストラリアの学校だと思います。非常に個別化はされています。ただ気になるのは個別化はされているんですが、進度が非常にのろい。日本の先生は同じ時間で集団を単位に教えているのに、アメリカの先生は1の子と向かい合ってしまう。あとの子は無視してしまうわけです。ですから全体の進度は遅れてしまうし、同じ時間でも1人しか指導できないわけですから当然平均が下がります。言うほど個に目を注ぐというのはやさしくはないと思うのですが……。

永井 先ほど申し上げました満足度の低いクラスの達成度はどうなるかということは、そのこととかわると思うのです。つまり、同質性を前提にした集団の動かし方はむずかしくなってきたと思う。そこで異質性にもかなり配慮しなければということになります。それはいろんな意味で社会的なコストを必要としていると思うのです。そのことを抜きにして、学校の転換や教師の仕事が変わっていくということはなかなかむずかしいのではないのでしょうか。

学級担任の前に1人の人間として

深谷 コストとは具体的にどういうことになりますか。

永井 学校建築の問題とか、設備の問題、ティーチング・アシスタントの問題などですが、どれをとっても相当覚悟して取り組んでいかないと進んでいけないのではないでしょ



うか。

深谷 個別化を進めていくには、個別的な教育が成り立つ条件が必要で、例えば、小さな教室がもっとたくさんなくてはいけないとか、参考書や資料集が子どもの数だけなければいけないとか、1つのクラスを3つに分けるなら先生はあと2人必要だとか、まだ日本の場合は条件が欠けているのでしょうか。そこでチーム・ティーチングの加配をどうご覧になっていますか。

田中 日本の場合は、主になる先生に気を使いながらやっているという状況で、まだ定着していないのではないのでしょうか。

永井 よくも悪くも、“私のクラス”という感じでやるわけですから……。

深谷 メイン・ティーチャーとアシスタント・ティーチャーがいたら、クラスを2つに分けると思ったのですが、そういう発想はないのでしょうか。

田中 そこが以前から思っていることなのですが、学級制が学習組織として1つのネックになっているということです。学級制以外にもっと多様化した学習形態が考えられるのではないかという気がします。

深谷 確かに学級があるのは発展途上の社会

の学校で、豊かな社会の学校は中学校ともなると学級はないですね。学習のグループがあるわけで、田中先生がおっしゃるように、もしこういうデータをふまえてやろうとすると学級を崩していくというくらいまでのことがないと……。

田中 崩すというとちょっとラジカルになるかもしれませんが、中学校の教育の成果としてホームルームは評価すべきだと思う。そのよさを生かしながら、かつ学習組織の柔軟性みたいなものをどう取り込んでいくかということではないかと思います。

深谷 一足飛びに個別にいくのではなく、学級集団をふまえながら個別化をという考え方はですか。

永井 どの辺りに落ち着いたらいいかとなると、どうしてもそうなると思う。従来のあり方に対するアンチテーゼとしては、深谷先生がおっしゃったように、これまで歴史的には意味があった学級制というのは、日本の現状からするとかなり問題を含んでいるということが言えると思います。ただ、先ほど深谷先生がご指摘なさったようなアメリカ型を日本でも目指していくべきなのか、それとも第3の道というか、日本の従来のあり方ともう少

し異質性を前提にするようなスタイルを折衷するような方向を目指すのかは、これからの学校改革の重要な課題になるのではないのでしょうか。

田中 いろんなタイプの学校があってもいい。そして、いろんな学校の中から親や子どもが自由に選んでいけばいいと思うのですが。

永井 中学校段階でそこまでいくとなれば、学区制なども大きな問題になりますね。

田中 今の中学校のカリキュラムなり、通塾の実態や教室の秩序を支えているのは高校入試だと思います。この箍（たが）がはずれてしまうと、いろんなことができると同時にいろんなことが起こりうると思う。特に現在、都市部を中心に中・高一貫校への需要が増えていますので、入試を前提とした授業のやり方ではむしろかくなるのではないかと思います。

深谷 今まさに学校が過渡期にきている。ですから、単純に集団から個別にといえる話ではないんですね。そこでこの『モノグラフ』をお読みになっている先生方に一言ございませんか。

田中 私は自分も担任していますから、このデータを興味深く見たのですが、評価の低いクラスはどんなクラスかということ、先生が約束を破ったとか、先生から無視されたというようなことなんですね。これは学級担任ということだけでなく、1人の人間として考えていってほしいと思います。

永井 今、先生方が常識的に考えていることがなかなか通用しなくて、新しい方向性を考えていく必要があるということが、今回のデータに表れていると思います。つまり集団を通して動かしていくとか、あるいはなるべく生徒に違いがあるということに目をつぶっ

て同質性を前提にして子どもに接していこうとか、そのような教師と生徒の関係の伝統的なスタイルそのものが問われてきているということを示しているデータだと思いますので、そのことを考えていただけたらと思います。

深谷 小学校の調査の半年後に追跡調査を行ったところ、100クラスのうち、6割くらいは変わらないのですが、劇的に子どもからの評価がよくなったクラス、悪くなったクラスがありました。つまり、先生と子どもたちとの関係というのは生きもの同様に、調査時点では、ある先生は評価が低かったけれども、永井先生がおっしゃったようなことを配慮すると、今度は評価が上がるかもしれない。逆にいい評価だった先生も、例えば、いじめや不登校などの対応がまずいと今度は下がるかもしれないのです。ですから評価が低いからといってあきらめないで、子どもたちに目を向けていったらいいのではないかと思います。本日はありがとうございました。

永井聖二（ながい・せいじ）氏

群馬県立女子大学文学部教授。1949年、東京生まれ。教育社会学専攻。教師論、教師と生徒関係の社会学的研究など。



田中統治（たなか・とうじ）氏

筑波大学教育学系助教授。1951年、鹿児島生まれ。専門分野：教育課程学（カリキュラムの社会学的研究）。

■
調査レポート

生徒と学級担任

深谷昌志 (静岡大学教授)

三枝恵子 (埼玉県立松山高等学校教諭)





調査レポート

生徒と学級担任

要約

① 「今の担任になってよかった」（担任への満足度）と感じている生徒は「とてもよかった」22.7%、「かなりよかった」を合わせると43.3%、逆に、「ぜんぜんよくなかった」と思っている生徒は10.6%、「あまりよくなかった」を合わせると24.4%である。

性別では男子に満足度がやや高い。また、教師の性別に対する満足度は、男性教師に対する男子生徒は5割、女子4割。女性教師に対しては男子生徒3割、女子4割と、男子生徒の方が教師の性別に満足度の差が顕著にみられる。（p.29 表19、p.33 表22、p.34 表23）

② 担任への満足度が最も高いクラスは96.9%、クラス32人中31人が「今の担任になってよかった」と高く評価をしている。最も満足度の低いクラスは0.0%、逆に「今の担任になってよくなかった」と答える割合が75.8%にも達する。（p.32 表21、p.48 表33）

③ 担任への満足度の高い群と低い群を比較してみると、次の通りである。

・担任への満足度が高い群は「クラスへの満

足度」も高い。しかし、担任への満足度が30%未満の低い群でも「クラスへの満足度」は6割を超える。（p.35 表24）

・満足度の高い群の生徒は、担任と個人的な話をする機会を「ほとんど毎日」「週に2、3回」する割合が3割、「まったく話さない」とする者が4.8%。満足度の低い群では「ほとんど毎日」話す割合は3.3%にすぎず、逆に「まったく話さない」と答える生徒が22.0%、「めったに話さない」を合わせると6割を超える。（p.36 表25）

・満足度の高い群は「先生からほめられた」「先生の方からあいさつしてくれた」「悩みごとの相談にのってもらった」など担任とポジティブな接触を多く持つ。一方、満足度の低い群は「先生が約束を破る」「先生から冷たく無視される」「先生から傷つくようなことを言われる」とネガティブな接触が多い。（p.37 表26）

・満足度の高い群は、担任は学業成績からプライベートな心理的側面まで頼りにされ、また、人間的なやさしさや温かさ、誠実な「教師イメージ」を持たれている。（p.38 表27、p.44 表31）

・満足度の高い群では、クラスの様子を「明

るく元気で仲間への思いやりがある」と感じている。また、「友だちと仲よくなり、係の仕事や掃除をまじめにやり、家でよく勉強するようになり、嫌いだった勉強が好きになる」といった自分自身がよりよい方向へ変化していると感じている。逆に、満足度の低い群には担任に対して、「厳しさや冷たさ」での項目の数値が高く、担任との信頼関係が持たず、「好きだった勉強が嫌いになり、先生も嫌いになる」といったマイナスの変化もうかがえる。(p. 40 表28、p. 42 表29、p. 43 表30)

④ 学校の楽しさでは、担任への満足度の上位群下位群で大きな差がみられない。これは、中学校が教科担任制であることや、部活動への参加や友人関係なども、学校の楽しさに影響を与えていると考えられる。(p. 45 図3)

⑤ 担任への満足度の上位3クラスと下位3クラスを比較し両群の特徴をみると、上位クラスの先生は温かさややさしさ、誠実さを持って生徒と接し、生徒との人間関係が円滑に行われ信頼を得ている。そして、学級集団に活力を与え学習意欲も高まり、生徒の人間形成により影響を与えている。一方、下位クラスの先生は、冷たく厳しく、生徒との接触量も少ない。そのため生徒との信頼関係が持たれず、「好きだった勉強が嫌いになり、先生も嫌いになる」といった傾向がみられる。(p. 54 表39、p. 55 表40、p. 57 表41)

今回の調査分析を通して、教科担任制の中学校においてさえ、担任の影響は大きく、担任の温かさややさしさ、誠実さは生徒たちの人間形成により影響を与え、学校生活を充実させていることがわかった。中学生という発達課題の中で、多様な中学生を支え、学校生活を充実させ、よりよい人間形成を図るためには、部活動や友人関係、教科担任など様々な要因が考えられる。しかし、担任と生徒の信頼関係の基盤が重要な要因であることも忘れてはならない。

【調査概要】

対象●東京・埼玉の中学1～3年生1,065名
(男子537名、女子528名)、31クラスの生徒。

時期●1995年11月～12月

方法●学校通しの質問紙調査

サンプル構成 (人)

	1年	2年	3年	合計
男子	202	131	204	537
女子	189	138	201	528
合計	391	269	405	1,065

第1章 調査の概要



中学生は多感な年齢で、指導がむずかしい。反発したり無視をしたりして、なかなか言うことをきかない。そうした生徒たちを教師たちはどう指導しているのか。今回は生徒の目から教師を捉えてみたいと思った。調査対象は中学1、2、3年の1,065名（男子537名、女子528名）、31クラスの生徒たちである（表1）。

調査分析にあたっては、生徒たちにとって「生徒の期待を満足させる担任がどのような

タイプであるか」に調査視点をおき、中学生にとっての「理想の教師像」とはどのようなものであるかを探ろうとした。そのため、調査項目が担任評価につながる内容となり、調査を断られることが多く、教師仲間や知人の紹介を通して個々にサンプルを収集した。また、担任がクラスの調査票を回収するため、生徒たちがより素直な気持ちを記入できるように、調査票は1部ずつ封筒に入れ、記入後は生徒自身で封をし、クラス別の大きな封筒

表1 サンプル数

	1年	2年	3年	合計
男子	202	131	204	537
女子	189	138	201	528
合計	391	269	405	1,065

(人)

の中に無差別に回収するといった配慮を行った。「生徒からの声を聞く」というのは簡単だが、教師にとって、それほど気持ちのよいものではない。それだけに調査にあたって、調査に協力してくれる先生を探すのは大変だった。それでも、なんとか31人の協力を得

ることができた。改めて先生方に感謝の気持ちを述べたいと思う。

このような経緯を考えると、今回調査を引き受けてくれた31クラスの担任の先生は、生徒との関係や学級経営において、かなり自信のある教師たちということが推測できよう。

1. 生徒たちのプロフィール DDD

さて、このような調査概況を踏まえ、今回調査対象となった生徒のプロフィールや学校生活をみてみることにする。表2は部活動や得意教科、成績などについて示した。(1)部活動の参加状況は全体の51.2%が運動部、10.8%が文化部で熱心に活動している。(2)得意な教科をみると、男子が社会・数学・理科・体育、女子は音楽・美術・英語に得意な生徒が多い。(3)成績は上位とする者が男子で13.8%、女子は6.1%、下位者の男子は17.4%、女子は21.4%と全体にやや男子の方が成績の自己評価が高い。(4)クラスの中での友人関係では、「親しい友人が2～3人いる」が最も多く39.4%、「1人もいない」者も14.5%いる。性別では「親しい友人が2～3人いる」男子は34.8

%、女子は44.2%、一方「1人もいない」男子は19.4%、女子は9.5%と、女子に比べ男子の友人関係が希薄な様子がうかがえる。(5)は自分自身のタイプを自己評価したものである。

表3、4はそうした生徒のクラス、部活動への満足度を示した。65.3%の者が自分のクラスに満足し、70.8%が部活動に満足感を持っている。そして、47.5%が学校に来るのを「とても・わりと楽しみ」にしている(表5)。

今回調査対象となった生徒は、東京・埼玉の熱心に部活動に参加し、親友がクラスに1～3人くらいおり、クラスや部活動に満足している生徒が半数を超える学級集団である。

表2 調査対象のプロフィール

(1) 部活動の参加

(%)

		運 動 部		文 化 部		以前入っていたが今は入っていない	ずっと入っていない	その他
		熱心に活動している	あまり熱心でない	熱心に活動している	あまり熱心でない			
全 体		51.2	13.9	10.8	7.0	12.1	1.4	3.6
性 別	男 子	59.8	13.2	3.1	4.8	12.0	2.1	5.0
	女 子	42.3	14.7	18.6	9.3	12.2	0.8	2.1

(2) 得意な教科

(%)

		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	体育	技術・家庭	英語
全 体		5.9	12.7	12.0	8.8	12.3	8.2	22.2	3.8	14.1
性 別	男 子	4.4	16.6	15.7	13.5	5.4	4.4	24.7	3.7	11.6
	女 子	7.4	8.7	8.3	4.1	19.2	12.0	19.7	3.9	16.7

(3) 成績

(%)

		上	中の上	中	中の下	下
全 体		9.9	17.0	32.2	21.5	19.4
性 別	男 子	13.8	17.8	31.1	19.9	17.4
	女 子	6.1	16.2	33.2	23.1	21.4

(4) クラスの中で悩みを相談できるほどの親しい友人の数

(%)

		いない	1人いる	2～3人 いる	4～5人 いる	6～10人 いる	それ以上 いる
全体		14.5	8.5	39.4	21.9	8.4	7.3
性別	男子	19.4	5.8	34.8	20.9	8.5	10.6
	女子	9.5	11.2	44.2	22.8	8.3	4.0

(5) 自己のタイプ

(%)

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 仲よしの友だちが多い	21.1	49.0	25.8	4.1
2. 勉強が得意	5.1	16.5	47.6	30.8
3. スポーツが得意	18.0	30.1	34.3	17.6
4. 決まりを守る	13.3	42.2	34.0	10.5
5. 忘れ物をしない	14.2	33.8	38.4	13.6
6. 大勢の人の前で発表したりするのが得意	7.2	14.6	42.1	36.1
7. 体育祭や文化祭などの係の仕事が好き	17.7	26.1	34.8	21.4
8. 担任の先生にほめられることが多い	3.8	13.7	53.4	29.1
9. 担任の先生に叱られることが多い	7.0	12.3	51.3	29.4

表3 クラスへの満足感

(%)

		とてもよかった	わりとよかった	どちらともいえない	あまりよくなかった	ぜんぜんよくなかった
全 体		26.7	38.6	22.1	6.9	5.7
性別	男 子	25.3	38.9	23.8	7.1	4.9
	女 子	28.0	38.5	20.5	6.6	6.4

表4 部活動への満足感

(%)

		とてもよかった	わりとよかった	どちらともいえない	あまりよくなかった	ぜんぜんよくなかった
全 体		46.1	24.7	16.9	7.3	5.0
性別	男 子	50.6	21.4	16.0	6.8	5.2
	女 子	41.4	28.1	17.8	7.8	4.9

表5 学校に来るのが楽しみか

(%)

		とても楽しみ	わりと楽しみ	少し楽しみ	あまり楽しみでない	ぜんぜん楽しみでない
全 体		17.4	30.1	25.8	16.2	10.5
性別	男 子	16.4	26.8	27.9	17.2	11.7
	女 子	18.4	33.4	23.7	15.2	9.3

2. 担任と生徒たち DDD

次に、1,065名の生徒と担任31名について、担任の専門教科や担任との関係を見ていくことにする。表6は担任の専門教科である。前述の通り調査実施がかなり困難だったため、個人的にサンプルを収集したので専門教科にかなり片寄りがみられる。次に、1週間の担任が担当する授業時間数についてみると、4時間が39.9%、3時間が26.4%と合わせて約7割が1週間に3時間から4時間の担任の授業を受けていることがわかる。また、担任の授業がまったくない生徒も10.3%となってい

る(表7)。ちなみに、担任の性別は男性教師25名、女性教師6名である。

表8は、担任と生徒が個人的な話をする機会がどれくらいあるかを尋ねた結果である。「ほとんど毎日話をする」と答えた生徒は7.3%、「週に2、3回」が13.8%、一方「まったく話をしない」者も13.8%、「めったにない」(38.6%)を合わせると半数を超える生徒が担任と個人的な接触の機会がないことがうかがえる。

表6 担任の専門教科

(人)									
国語	社会	数学	理科	音楽	美術	体育	技術・家庭	英語	合計
6 (1)	3 (0)	2 (0)	6 (0)	1 (1)	2 (0)	5 (2)	2 (1)	4 (1)	31 (6)

()は女性

表7 1週間の担任の授業時間数

(%)					
1時間	2時間	3時間	4時間	5時間以上	授業はない
6.6	13.0	26.4	39.9	3.8	10.3

表8 担任と個人的な話をする機会

(%)					
ほとんど毎日	週に2、3回	週に1回くらい	月に1、2回	めったにない	まったくない
7.3	13.8	13.2	13.3	38.6	13.8

そこで、担任教師とのかかわりの実態をさらに詳しく数値でみていくことにする。表9は、「担任の先生が知っている自分のこと」について尋ねたものである。ほぼ半数以上の生徒は、「仲のよい友だち」や「得意な教科」「部活動やクラブ活動の様子」「掃除や休み時間の様子」「担任以外の授業の様子」な

どは知っているだろうと考えており、逆に、「家族の様子」「好きな異性」「悩み」「好きなテレビ番組や音楽」などは知らないだろうと答えている。すなわち、学校生活での自分のことや学校内で見ている自分の姿は知っているだろうが、家庭生活や自分のプライベートなことはほとんど知らないだろうと判断して

表9 担任が知っている自分のこと

(%)

	よく知っていると思う	わりと知っていると思う	あまり知らないと思う	ぜんぜん知らないと思う
1. 仲のよい友だち	23.5	51.2	19.9	5.4
2. 得意な教科	17.5	43.7	31.4	7.4
3. 部活動やクラブ活動の様子	15.9	30.2	38.6	15.3
4. 掃除や休み時間の様子	10.9	39.4	40.7	9.0
5. 担任以外の授業の様子	9.5	38.2	43.4	8.9
6. 家族の様子	3.6	18.3	41.1	37.0
7. 好きな異性	2.8	5.7	18.1	73.4
8. 悩み	2.5	9.3	35.7	52.5
9. 好きなテレビ番組や音楽	1.7	5.2	30.7	62.4

いる。

では、担任の先生はどのくらい熱心に自分たちを指導してくれていると考えているのだろうか。表10は、「朝の会から終わりの会」までの1日の中で、担任が指導する共通の時間や学校行事の指導について尋ねたところ、「朝の会」「昼食（給食）の時間」「終わりの

会」「掃除のとき」など日々の生活指導は「とても」と「かなり」熱心に指導するを合わせると5～6割、また「学校行事のとき」では8割の生徒たちが担任は熱心に指導してくれると評価している。

表10 担任の指導の熱心さ

(%)

	とても熱心	かなり熱心	少し熱心	あまり熱心でない	まったく熱心でない
1. 朝の会	20.0	30.6	38.6	8.7	2.1
2. 昼食（給食）の時間	23.1	22.3	32.4	16.3	5.9
3. 終わりの会	22.0	31.5	35.8	8.7	2.0
4. 掃除のとき	32.8	30.1	26.2	8.5	2.4
5. 学校行事のとき	58.5	24.1	12.3	2.7	2.4

担任の先生に対するイメージは表11によると、「何かを決めるとき、話し合いを大切に」「勉強を熱心に教えてくれる」「まちがえたとき、素直にあやまる」など担任の教師として熱心な指導と、人間的な側面も評価している結果である。また、「遅刻や時間に厳しい」「忘れ物をすると厳しく叱る」など厳しい教師イメージは薄れている。教師としての当然と思える内容である授業面では生徒のために熱心に指導するが、遅刻や忘れ物など生活指導面ではあまり厳しくないといったイ

メージだろうか。しかし、「悩みごとを一緒に考えてくれる」「休み時間や昼休みによく教室に来る」などの授業以外での接触の少なさも感じられる。

表12は、具体的な教師と生徒の接触場面をあげ接触量を尋ねたものである。全体の傾向ではどの項目でも数値が低く、担任と生徒の接触体験の少なさがうかがえる。「手伝いを頼まれたこと」「先生の方からあいさつしてくれたこと」は3～4割の生徒が体験している。しかし、「先生から傷つくようなことを

表11 担任の教師像

	とても そう思う	わりと そう思う	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
1. 掃除などを一緒にしてくれる	30.6	32.8	22.5	14.1
2. 自分の高校受験の頃の話や学生時代の話をしてくれる	28.1	34.6	19.9	17.4
3. 何かを決めるとき、話し合いを大切に	26.7	46.1	19.7	7.5
4. 遅刻や時間に厳しい	24.3	28.9	35.1	11.7
5. 勉強を熱心に教えてくれる	23.1	45.4	23.2	8.3
6. まちがえたとき、素直にあやまる	22.6	45.0	20.4	12.0
7. 授業中、冗談を言って笑わせる	21.8	34.7	27.8	15.7
8. 校外で会ったら、声をかけてくれる	12.1	33.7	28.8	25.4
9. 忘れ物をすると厳しく叱る	11.1	20.0	46.7	22.2
10. 悩みごとを一緒に考えてくれる	7.8	29.0	35.2	28.0
11. 休み時間や昼休みによく教室に来る	5.0	8.9	37.6	48.5

○は最大値

言われたこと」「先生が約束を破ったこと」「先生から冷たく無視されたこと」などネガティブな接触も少ないものの、「悩みごとの相談にのってもらったこと」「いじめられているとき、先生が助けてくれたこと」「ものがなくなったとき、一緒にさがしてくれたこと」などプラス志向の心理的な接触も少なく、教師と生徒の関係の希薄さが目立つ結果である。

中学校は教科担任制であり、生徒たちは教科担任や部活動の顧問の先生からも影響を受

け、クラスや部活動での満足感が生徒たちの学校生活の充実感を支える大切な要因と考えられる。しかし、担任教師もまた生活指導、進学指導、行事でのクラス指導など、専門教科を教えるだけでなく中学生活のさまざまな部分にわたり深くかかわって影響を与えているのも事実である。そうした担任との関係の中で、生徒たちはどのように変容を遂げていくのだろうか。

表12 担任との接触体験

(%)

	しょっちゅう ある	わりと ある	ときどき ある	今までに 1、2回 ある	ぜんぜん ない
1. 手伝いを頼まれたこと	9.0	28.1	36.6	16.1	10.2
	37.1				
2. 先生の方からあいさつしてくれたこと	6.6	18.5	31.0	18.8	25.1
	25.1				
3. 先生から傷つくようなことを言われたこと	6.0	4.6	8.1	18.5	62.8
	10.6				
4. 先生が約束を破ったこと	5.7	4.3	8.9	15.1	66.0
	10.0				
5. 先生から冷たく無視されたこと	3.9	2.7	7.4	10.2	75.8
	6.6				
6. 先生からほめられたこと	2.4	10.6	43.6	25.4	18.0
	13.0				
7. 悩みごとの相談にのってもらったこと	1.5	2.8	6.2	13.5	76.0
	4.3				
8. いじめられているとき、先生が助けてくれたこと	1.1	2.4	4.8	4.8	86.9
	3.5				
9. ものがなくなったとき、一緒にさがしてくれたこと	0.8	2.7	5.8	9.7	81.0
	3.5				
10. 休日、先生とみんなで遊びに行ったこと	0.3	0.2	1.7	4.0	93.8
	0.5				

○は最大値

表13によれば、今の担任の先生になってから、「クラスの友だちみんなと仲よくなった」と「とても・わりと」そう感じている生徒が4割、「係の仕事や掃除をまじめにするようになった」「学校に来るのが楽しみになった」と感じている生徒が3割、「好き

だった勉強が嫌いになった」とマイナスの変化を感じる生徒は1割。逆に、「先生が嫌いになった」「好きだった勉強が嫌いになった」と「あまり・ぜんぜんそう思わない」割合も半数に上り、全体の傾向としては担任による影響はあまり強くみられない。

表13 今の担任になって自分が変わったと思うこと

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
1. クラスの友だちみんなと仲よくなった	14.5	23.6	33.7	12.1	16.1
2. 係の仕事や掃除をまじめにするようになった	10.7	22.2	36.6	15.6	14.9
3. 学校に来るのが楽しみになった	10.0	17.7	35.5	14.2	22.6
4. 先生が嫌いになった	9.3	6.3	31.1	16.4	36.9
5. 授業中、おしゃべりが多くなった	8.6	16.3	35.4	21.3	18.4
6. 時間を守るようになった	8.4	16.7	38.5	17.8	18.6
7. 忘れ物をしなくなった	8.2	17.8	36.9	18.2	18.9
8. 好きだった勉強が嫌いになった	4.0	5.6	35.5	19.4	35.5
9. 家でよく勉強するようになった	3.8	15.3	37.1	18.1	25.7
10. 嫌いだった勉強が好きになった	3.8	11.0	33.2	20.9	31.1

次に、表14、15は生徒たちの考えるクラスの実態をまとめた。クラスの様子からみると「文化祭や体育祭などの行事にクラスみんなでとりくむ」と考えている生徒が8割、「授業が終わるチャイムが鳴ると、すぐ本やノートを片づける人が多い」「授業中、隣や後ろの人と

おしゃべりする人が多い」「先生に『静かにしなさい』と言われたら、すぐ静かになる」「チャイムが鳴って先生が来るまでに、席にしている人が多い」と答えた生徒がほぼ半数を占める（表14）。また、他のクラスと比較して、自分たちのクラスを「元気のあるクラ

表14 クラスの様子

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
1. 体育祭や文化祭などの行事にクラスみんなでとりくむ	38.3	37.8	16.4	6.0	1.5
2. 授業が終わるチャイムが鳴ると、すぐ本やノートを片づける人が多い	20.8	44.3	23.6	10.3	1.0
3. 授業中、隣や後ろの人とおしゃべりする人が多い	16.3	41.1	23.7	16.8	2.1
4. 先生に「静かにしなさい」と言われたら、すぐ静かになる	18.1	30.5	27.1	19.4	4.9
5. チャイムが鳴って先生が来るまでに、席にしている人が多い	11.1	35.7	21.1	25.6	6.5
6. 忘れ物をする人が多い	10.2	37.1	33.6	17.4	1.7
7. 行事のとき、いろいろな人がクラスの代表になる	8.2	23.7	36.4	23.8	7.9
8. 係などの仕事をするとき、係以外の人も協力してくれる	6.1	20.9	33.3	26.2	13.5
9. 先生が来なくても掃除をまじめにする人が多い	5.8	20.9	30.7	30.9	11.7
10. 先生がいなくても自習課題を静かにやる	4.7	15.4	24.2	36.5	19.2
11. 放課後、先生とおしゃべりすることが多い	4.2	10.4	32.5	27.8	25.1
12. 学級活動の話し合いのとき、自分の意見を発表する人が多い	2.8	11.3	32.5	36.7	16.7

ス」「楽しいクラス」「行事で燃えるクラス」「男女の仲のよいクラス」と評価している(表15)。こうしたクラスの雰囲気は担任のかかわり方によって大きく変化してくるだろうと

考えられる。

表16は、担任の先生をどのくらい信頼しているか尋ねたものである。「高校受験など進路について」「勉強の仕方がわからないとき」「成績

表15 クラスイメージ (他のクラスと比較して)

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
1. 元気のあるクラス	46.2	31.0	16.4	4.5	1.9
2. 楽しいクラス	36.0	37.1	17.2	5.6	4.1
3. 行事で燃えるクラス	33.1	28.9	23.2	10.3	4.5
4. 男女の仲のよいクラス	16.7	33.5	34.8	10.5	4.5
5. まとまりのあるクラス	10.3	28.0	35.4	19.6	6.7
6. よく勉強するクラス	5.2	20.1	48.1	20.6	6.0
7. 授業中、みんなが積極的に 発表するクラス	3.8	15.8	38.5	29.3	12.6
8. クラスの約束を守るクラス	3.7	25.5	47.0	18.5	5.3

が下がったとき」など学業成績に関しては、半数以上の生徒が先生を頼りにしている。しかし、「好きな異性ができたとき」「家出したくなるほど、親に叱られたとき」など個人的

なことはあまり頼りにならないようである。また、「将来自分の結婚式に担任の先生を招待したいか」と尋ねた結果、表17によれば、「とても招待したい」と答えた生徒は13.5%、

表16 担任への信頼

(%)

	とても頼りになる	わりと頼りになる	あまり頼りにならない	ぜんぜん頼りにならない
1. 高校受験など進路について	24.7	42.4	22.5	10.4
2. 勉強の仕方がわからないとき	10.5	43.9	32.2	13.4
3. 誰かにいじめられたとき	11.9	27.8	26.3	34.0
4. 学校に行きたくなくなったとき	10.9	26.5	27.5	35.1
5. 成績が下がったとき	10.2	40.7	34.8	14.3
6. クラスの友だちとけんかしたとき	9.0	28.5	30.3	32.2
7. 家出したくなるほど、親に叱られたとき	5.0	20.9	30.7	43.4
8. 好きな異性ができたとき	1.7	10.2	25.7	62.4

「わりと」を合わせるとほぼ4人に1人が招待したいと思っており、将来も担任と継続的な関係を維持したいと考えている。

次に、そうした担任の先生を生徒たちがどのように評価しているのかをみてることにする。表18は「普通の先生を60点として、担任の先生はどのくらいの点数か」を自由記述させたところ、「61～70点」が最も多く18.1%、普通以上すなわち「61点以上」の評価をした生徒が過半数を超える。

では、「今の担任になってよかった」と思っているのはどのくらいであろうか。表19によれば、「とてもよかった」と答えた生徒

が22.7%、「かなり」を合わせると43.3%が「よかった」と今の担任に対して好意的に感じている。しかし、「ぜんぜんよくなかった」と感じている生徒も10.6%、「あまりよくなかった」を合わせるとクラスの4分の1は担任に不満を持っていることも事実である。さらに、過去の担任についての満足度を尋ねた結果（表20）によれば、小学校4年生の担任を「とてもよかった」とする割合が37.0%、「かなり」を合わせると、ほぼ6割の生徒が担任に満足感を持っている。担任への満足感は学年が進むにつれ減少する傾向にある。

表17 結婚式に招待したいか

(%)

		とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
全 体		13.5	13.4	26.4	24.2	22.5
性 別	男 子	16.2	13.9	27.0	19.0	23.9
	女 子	10.7	12.8	26.1	29.4	21.0

表18 担任評価（普通の先生を60点として）

(%)

101点 以上	91～ 100点	81～ 90点	71～ 80点	61～ 70点	51～ 60点	41～ 50点	31～ 40点	30点 以下
0.9	8.5	10.2	16.3	18.1	14.5	8.3	5.4	17.8

表19 担任への満足感（今の担任になってよかったか）

(%)

とてもよかった	かなりよかった	少しよかった	あまりよく なかった	ぜんぜんよく なかった
22.7	20.6	32.3	13.8	10.6
43.3			24.4	

表20 過去の担任への満足感

(%)

	とても よかった	かなり よかった	少し よかった	あまりよく なかった	ぜんぜんよく なかった
1. 小学4年生	37.0	21.5	20.3	9.5	11.7
2. 小学5年生	32.2	19.5	20.0	12.5	15.8
3. 小学6年生	31.3	20.2	19.0	12.4	17.1

第2章 担任への満足度



前章では、今回の調査対象となった中学生たちと担任との関係の概要をまとめてみたが、これからは、表19「今の担任になってよかったか」という担任評価の項目を尺度として、

担任への満足度の高い学級と低い学級を比較しながら、学級集団の充足と担任との関係を探っていくことにする。

1. 担任と満足度 DDD

表21は、生徒たちの担任への評価を「今の担任になってよかったか」の満足度の項目を用い、満足度の高い順に並べたものである。表の順位は今回調査対象となったクラスの中で担任への評価の一番高いクラスを1位とし順次低くなり、担任への満足度が最も低かったクラスを31位で示してある。

まず、今回担任への満足度が最も高かった先生と生徒たちの実態からみていくことにしよう。まず、表21の中で1位のクラスに着目すると、中学2年生でクラスの人数は32名、クラスの担任への満足度、すなわち、今の担

任になって「とてもよかった」59.4%、「かなりよかった」を合わせると96.9%が今の担任に満足している様子うかがえる。なお、カッコ内の数値は「とてもよかった」の割合を示しており、1位の担任は59.4%、すなわちクラスの半数以上の生徒たちから「とてもよかった」と支持されていることがわかる。

さらに、自分のクラスへの満足度は、今のクラスになって「とてもよかった」58.1%、「わりとよかった」を合わせ77.1%がクラスへの満足度も高い。部活動への満足度については、今の部活動に入って「とてもよかつ

た」「わりとよかった」を合わせ83.8%が満足と答えており、このクラスの生徒は担任へも、クラスへも、そして部活動にもほぼ満足した学校生活を送っている様子がうかがえる。

なお、このクラスの担任は男性で、専門教科は理科である。

同様に、今回の調査で満足度の最も低かった31位のクラスをみていくことにしよう。学年は1位のクラス同様に中学2年生、クラス的人数は34名である。担任への満足度は、今のクラスになって「とてもよかった」0.0%、「かなりよかった」0.0%とクラスの誰一人、この先生が担任でよかったと思っていないことがうかがえる。また、クラスへの満足度をみると、今のクラスになって「とてもよかった」が6.1%、「わりとよかった」を合わせて

も4割にすぎず、担任にはもちろん、クラス集団にも半数以上の生徒が不満を抱いていることがわかる。そうした中で、部活動への満足度が「とても・わりとよかった」と感じている生徒が65.5%いることが心安らぐ結果である。

しかし、調査の概要でも述べた通り、今回調査を実施するにあたり、多くの学校で「担任評価の項目」の内容を理由に断られることが多く、調査を快く引き受けてくれた先生はそれなりに学級経営にも、生徒との関係においても、自信のある教師たちであろう。それがなぜ、このように担任への満足度が96.9%から0.0%までに差が生じてしまうのだろうか。この一覧表からはそうした差の生じる要因を見いだすことは困難である。

表21 担任への満足度一覧

順位	子 ども					教 師 性 別
	学 年	クラス 人 数	担任への満足度 (%)	クラスへの満足度 (%)	部活動への満足度 (%)	
1	2	32	96.9 (59.4)	77.1 (58.1)	83.8 (41.9)	男性
2	1	29	89.6 (65.5)	66.7 (40.0)	60.0 (33.3)	男性
3	1	38	86.8 (57.9)	79.5 (33.3)	87.9 (60.0)	男性
4	1	39	74.3 (41.0)	86.8 (44.7)	79.4 (61.5)	男性
5	2	31	74.2 (48.4)	74.4 (37.5)	65.6 (37.5)	男性
6	3	36	72.2 (38.9)	71.4 (14.3)	80.6 (51.6)	男性
7	3	30	66.7 (36.7)	83.4 (46.7)	72.7 (50.0)	男性
8	3	36	61.1 (33.3)	80.5 (33.3)	75.0 (52.8)	男性
9	3	34	58.9 (32.4)	60.0 (25.7)	50.0 (26.5)	女性
10	3	36	58.3 (36.1)	63.9 (22.2)	73.3 (50.0)	男性
11	3	35	57.2 (34.3)	62.9 (28.6)	69.2 (53.8)	男性
12	3	32	53.2 (18.8)	56.3 (37.5)	68.9 (44.8)	男性
13	1	34	53.0 (26.5)	50.0 (5.9)	70.0 (56.7)	男性
14	1	39	43.6 (28.2)	57.8 (28.9)	82.0 (56.4)	女性
15	1	32	37.5 (21.9)	46.9 (25.0)	50.0 (21.9)	女性
16	3	32	37.0 (12.5)	56.3 (21.9)	78.2 (56.3)	男性
17	3	31	31.9 (12.9)	67.8 (45.2)	57.2 (42.9)	男性
18	3	30	30.0 (13.3)	43.3 (10.0)	57.1 (33.3)	男性
19	2	37	29.7 (13.5)	62.1 (21.6)	64.8 (43.2)	男性
20	1	36	27.8 (11.1)	54.0 (18.9)	66.7 (41.7)	女性
21	1	37	27.0 (10.8)	50.0 (23.7)	69.7 (36.4)	男性
22	2	34	26.5 (5.9)	70.6 (26.5)	82.8 (55.2)	女性
23	1	36	25.0 (8.3)	86.1 (50.0)	59.4 (21.9)	女性
24	3	37	24.3 (8.1)	81.1 (21.6)	80.0 (48.6)	男性
25	3	35	22.8 (5.7)	52.7 (8.3)	72.2 (58.3)	男性
26	1	35	20.0 (11.4)	77.1 (31.4)	77.1 (57.1)	男性
27	3	30	20.0 (10.0)	70.9 (16.1)	53.9 (38.5)	男性
28	2	35	14.3 (0.0)	65.7 (8.6)	63.7 (45.5)	男性
29	2	32	9.4 (0.0)	56.3 (21.9)	78.2 (46.9)	男性
30	2	34	5.8 (2.9)	50.0 (17.6)	73.5 (50.0)	男性
31	2	34	0.0 (0.0)	39.4 (6.1)	65.5 (37.9)	男性
全 体			43.3 (22.7)	65.3 (26.7)	70.8 (46.1)	男性 25 女性 6

「とても」+「かなり(わりと)」よかった割合、()内は「とても」よかった割合
 ※担任教師の教科の項目は割愛しています。

2. 担任への満足度の差異 DDD

そこで、この担任への満足度の高いクラスと低いクラスの差異が生じる要因がどこにあるのか、さらに分析を深め、探っていくことにする。

まず、表22は今回分析の「キー」となった担任への満足度（表19）に、さらに生徒の性別と学年別の満足度の平均値を加えて示した。今の担任になって「とてもよかった」22.7%、「かなりよかった」を合わせ43.3%が今の担任に満足感を感じている数値である。性別では、男子が「とてもよかった」と答えた割合は25.2%、「かなりよかった」を合わせると、47.2%と過半数に近い。女子では、「とても

よかった」20.2%、「かなりよかった」を合わせても39.4%と、男子の方が担任に対して満足度が高い。学年では、「とてもよかった」「かなりよかった」を合わせると、1年生で47.3%、2年生31.4%、3年生47.5%である。中学3年間の生徒の発達段階を考えると、2年生で担任への満足度が低くなるのは当然といえよう。しかも、今回、調査時期が2学期末であり、3年生は高校進学に向け不安も多く、担任との進路相談など担任を頼りにする時期と重なったことも、3年生の満足度が高くなった要因の1つとして推測できる。

表22 担任への満足感 × 性・学年

		(%)				
		とても よかった	かなり よかった	少し よかった	あまりよく なかった	ぜんぜんよく なかった
全 体		22.7	20.6	32.3	13.8	10.6
性 別	男 子	25.2	22.0	31.2	12.4	9.2
	女 子	20.2	19.2	33.4	15.2	12.0
学 年	1 年	26.6	20.7	30.9	14.0	7.8
	2 年	15.7	15.7	29.4	17.9	21.3
	3 年	23.6	23.9	35.4	10.9	6.2

さらに、性的成熟への発育期にある中学生にとって、担任教師の性別の違いが、担任への満足度にどのような影響があるのかみたものが表23である。表によれば、全体の平均値では、男性教師への満足度45.1%に対し、女性教師36.5%と男性教師に対する満足度の方が高い。さらに、生徒の性別との関連をみると、男性教師に対する男子生徒の満足度51.0%、女子生徒39.1%、女性教師に対する男子生徒の満足度は32.7%、女子生徒40.6%と、男性教師に対しては男子生徒が、女性教師に

対しては女子生徒の満足度が高い傾向にある。また、男性教師に対し女子生徒の約3割、女性教師に対し男子生徒の3割が不満を抱いていることもわかる。

表21の満足度の一覧表からも、満足度の上位群に男性教師が多いが、今回調査対象となった担任の先生の性別は男性教師25名、女性教師6名であることを考えると、担任の性別が担任への満足度を規定する要因の1つと決めるにはややサンプル数の不足を感じる。

表23 男性・女性教師に対する満足感 × 性

		(%)				
		とてもよかった	かなりよかった	少しよかった	あまりよくなかった	ぜんぜんよくなかった
男性の担任	全体	23.9	21.2	31.5	12.4	11.0
	男子	28.0	23.0	30.0	9.7	9.3
	女子	19.8	19.3	33.1	15.1	12.7
女性の担任	全体	18.0	18.5	35.1	19.4	9.0
	男子	14.5	18.2	35.5	22.7	9.1
	女子	21.8	18.8	34.7	15.8	8.9

3. 担任への満足度を規定するもの DDD

そこで、担任への満足度、すなわち「今の担任になってよかったか」の項目を「キーワード」にして、さらに分析を加えていくことにする。表21の担任への満足度の一覧表によれば、「とてもよかった」「かなりよかった」を合わせ96.9%から0.0%までの担任への満足度に関きがある。そこで、満足度60%以上（8クラス）と満足度30%以上60%未満（10クラス）、満足度30%未満（13クラス）の3群に分け、満足度の高いクラス群と低いクラス群を比較分析することで満足度を規定する要因を探ることを試みた。

表24は満足群別にみた担任とクラスへの満

足度の平均値と担当教科である。満足度60%以上の満足度が高い群の「担任への満足度」の平均値は77.5%、「クラスへの満足度」の平均値は80.1%、クラスへの満足度も担任への満足度が高い群に高く、担任の影響はクラスの雰囲気にも大きく影響していることがわかる。さらに、担任の専門教科をみると国語、社会、数学、理科、英語のいわゆる主要5教科を担当する教師である。逆に、満足度の30%未満の低い群では、美術、体育、技術・家庭、社会、理科、英語、国語と多様な教科にわたっている。

そこで、教師とのかかわりが生徒の学校生

表24 担任への満足群

		(%)											
		担任への満足度	クラスへの満足度	教科									
				国語	社会	数学	理科	音楽	美術	体育	技術・家庭	英語	
担任への満足度	60%以上	77.5 (47.2)	80.1 (38.0)	24.6	11.8	10.7	25.7	0.0	0.0	0.0	0.0	27.2	
	30~60%未満	47.5 (24.2)	56.7 (25.1)	32.4	0.0	10.7	18.5	9.2	0.0	29.2	0.0	0.0	
	30%未満	19.8 (6.9)	62.9 (21.1)	7.1	14.3	0.0	16.0	0.0	15.2	15.7	15.7	16.0	

満足度 = 「とても」+「かなり（わりと）」よかった割合
 () 内は「とても」よかった割合

活への影響がないことは考えられないので、具体的な項目により、さらに満足度の高い群と低い群を比較してみることにする。

表25は担任と個人的な話をする機会がどのくらいあるかを尋ねたものである。60%以上の満足度の高い群では、「ほとんど毎日する」12.9%、「週に2、3回する」19.1%、「週に1回くらいする」を合わせると、クラスの半数の生徒が担任と授業以外に個人的な

話を1週間に少なくとも1回は体験していることになる。逆に「まったくない」割合は4.8%にすぎない。

一方、満足度の低い30%未満のクラスの生徒は担任と個人的な話をする割合は「ほとんど毎日する」3.3%、「週に2、3回する」9.7%、「週に1回くらいする」を合わせても3割にも満たない。逆に、「まったくない」とする割合が22.0%、「めったにない」を合わせると

表25 担任と個人的な話をする機会 × 担任への満足群

(%)

		ほとんど毎日	週に2、3回	週に1回くらい	月に1、2回	めったにない	まったくない
担任への満足度	60%以上	12.9	19.1	15.8	15.4	32.0	4.8
	30~60%未満	8.3	15.2	14.6	11.6	40.2	10.1
	30%未満	3.3	9.7	10.5	13.2	41.3	22.0

6割を超え、ほとんど担任との接触が持たれていない様子うかがえる。

次に、担任との接触の具体的な内容をあげ接触体験を尋ねたのが表26である。担任との接触体験では「先生の方からあいさつしてくれたこと」「悩みごとの相談にのってもらったこと」「ものがなくなったとき、一緒にさがしてくれたこと」などの項目が満足度60%以上の高いクラスにみられる特徴で、担任と

の関係が好意的で、人間的な側面が感じられる接触の様子うかがえる。

一方、満足度の低いクラスの特徴は、「先生から傷つくようなことを言われたこと」「先生が約束を破ったこと」「先生から冷たく無視されたこと」などネガティブな接触体験が多いことがわかる。

表26 担任との接触体験 × 担任への満足群

(%)

	担任への満足度			満足度 60%以上- 30%未満
	60%以上	30~60%未満	30%未満	
1. 手伝いを頼まれたこと	37.4	> 37.1	> 36.8	0.6
2. 先生の方からあいさつしてくれたこと	29.3	> 24.0	> 23.3	6.0
3. 先生からほめられたこと	15.3	11.7	12.7	2.6
4. 悩みごとの相談にのってもらったこと	8.2	> 5.1	> 1.6	6.6
5. ものがなくなったとき、一緒にさがしてくれたこと	5.5	> 3.9	> 1.8	3.7
6. いじめられているとき、先生が助けてくれたこと	4.3	> 4.1	> 2.6	1.7
7. 休日、先生とみんなで遊びに行ったこと	1.0	> 0.6	> 0.0	1.0
* 8. 先生が約束を破ったこと	9.5	7.2	13.5	- 4.0
* 9. 先生から冷たく無視されたこと	5.9	6.6	7.2	- 1.3
* 10. 先生から傷つくようなことを言われたこと	3.3	< 11.7	< 14.3	-11.0

「しょっちゅう」+「わりと」ある割合
*はネガティブな項目

表27は担任の教師イメージを満足群別に示した。満足度が60%以上と高い群の担任の先生は「自分の高校受験の頃の話や学生時代の話をしてくれる」「掃除などを一緒にしてくれる」「勉強を熱心に教えてくれる」「まちがえたとき、素直にあやまる」といったイメージを持たれている。自分の高校受験の頃の話や勉強の熱心さ、まちがえたとき素直にあや

まることや校外で会ったら声をかけてくれ、悩みごとを一緒に考えてくれるといった、教師として人間として温かみのある姿は満足度が高いクラス群ほど教師イメージとして認識されている。

さらに、図1は満足度60%以上のクラスの担任イメージと30%未満の担任イメージの違いを比較したものである。まず、差が大きい

表27 担任の教師像 × 担任への満足群

	担任への満足度			満足度 60%以上- 30%未満
	60%以上	30~60%未満	30%未満	
1. 自分の高校受験の頃の話や学生時代の話をしてくれる	45.4	> 27.3	> 18.3	27.1
2. 掃除などを一緒にしてくれる	36.0	27.0	29.9	6.1
3. 勉強を熱心に教えてくれる	35.5	> 27.1	> 12.6	22.9
4. まちがえたとき、素直にあやまる	31.7	> 23.1	> 16.8	14.9
5. 何かを決めるとき、話し合いを大切にする	29.0	30.1	22.7	6.3
6. 遅刻や時間に厳しい	25.1	30.2	19.4	5.7
7. 授業中、冗談を言って笑わせる	25.0	31.0	13.0	12.0
8. 校外で会ったら、声をかけてくれる	17.3	> 13.2	> 8.3	9.0
9. 悩みごとを一緒に考えてくれる	11.1	> 10.8	> 3.6	7.5
10. 忘れ物をすると厳しく叱る	10.3	12.6	10.4	- 0.1
11. 休み時間や昼休みによく教室に来る	5.9	2.7	6.2	- 0.3

「とても」そう思う割合

項目では、「自分の高校受験の頃の話や学生時代の話をしてくれる」「勉強を熱心に教えてくれる」「まちがえたとき、素直にあやまる」といった熱心な指導と人間性にかかわった項目が目を引く。

さらに、表は省略したが、日々の学校生活の中で担任の指導について比較すると、「朝の会」「昼食（給食）の時間」「終わりの会」

「掃除のとき」「学校行事のとき」のすべての指導において、満足度の高いクラス群は熱心に指導してくれていると感じている。担任への満足度は指導の熱心さ、生徒との接触体験に影響を与えている。

図1 担任の教師像 × 担任への満足群
(満足度60%以上のクラス群-30%未満のクラス群)

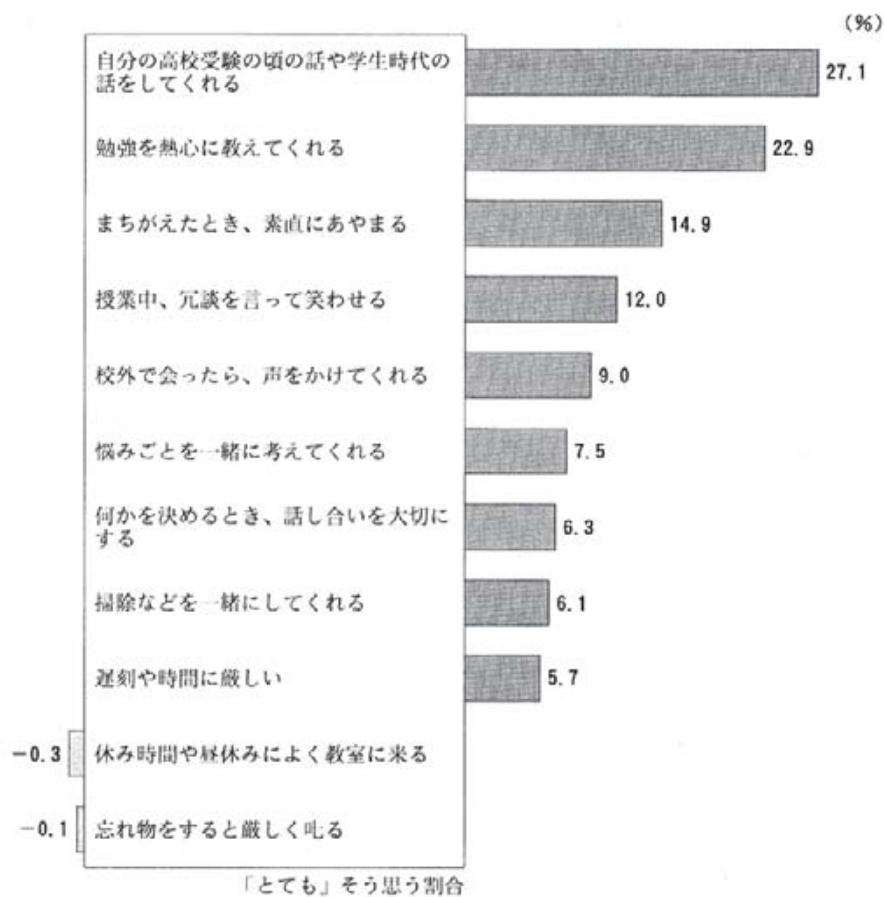


表28は、今の担任になって自分がどう変わったか、自分自身の変化をどのように認識しているかをみたものである。満足度が60%以上の高い群になるにつれ、「クラスの友だちみんなと仲よくなった」「係の仕事や掃除をまじめにするようになった」「学校に来るのが楽しみになった」「時間を守るように

なった」「忘れ物をしなくなった」「家でよく勉強するようになった」「嫌いだった勉強が好きになった」と、学校生活や学業に意欲的なポジティブな変化を感じている様子がうかがえる。また、満足度の低い群になるほど「好きだった勉強が嫌いになった」「先生が嫌いになった」とマイナスの変化が増加する傾

表28 今の担任になって自分が変わったと思うこと × 担任への満足群

(%)

	担任への満足度			満足度 60%以上- 30%未満		
	60%以上	30~60%未満	30%未満			
1. クラスの友だちみんなと仲よくなった	51.8	>	36.6	>	30.8	21.0
2. 係の仕事や掃除をまじめにするようになった	39.4		30.6		30.6	8.8
3. 学校に来るのが楽しみになった	37.3	>	27.4	>	22.2	15.1
4. 時間を守るようになった	33.9	>	23.2	>	21.1	12.8
5. 忘れ物をしなくなった	28.9	>	26.5	>	23.7	5.2
6. 家でよく勉強するようになった	28.1	>	21.8	>	11.7	16.4
7. 嫌いだった勉強が好きになった	21.6	>	15.8	>	10.2	11.4
* 8. 授業中、おしゃべりが多くなった	24.9		26.2		23.8	1.1
* 9. 好きだった勉強が嫌いになった	4.4	<	10.5	<	12.3	- 7.9
* 10. 先生が嫌いになった	4.4	<	13.4	<	24.1	-19.7

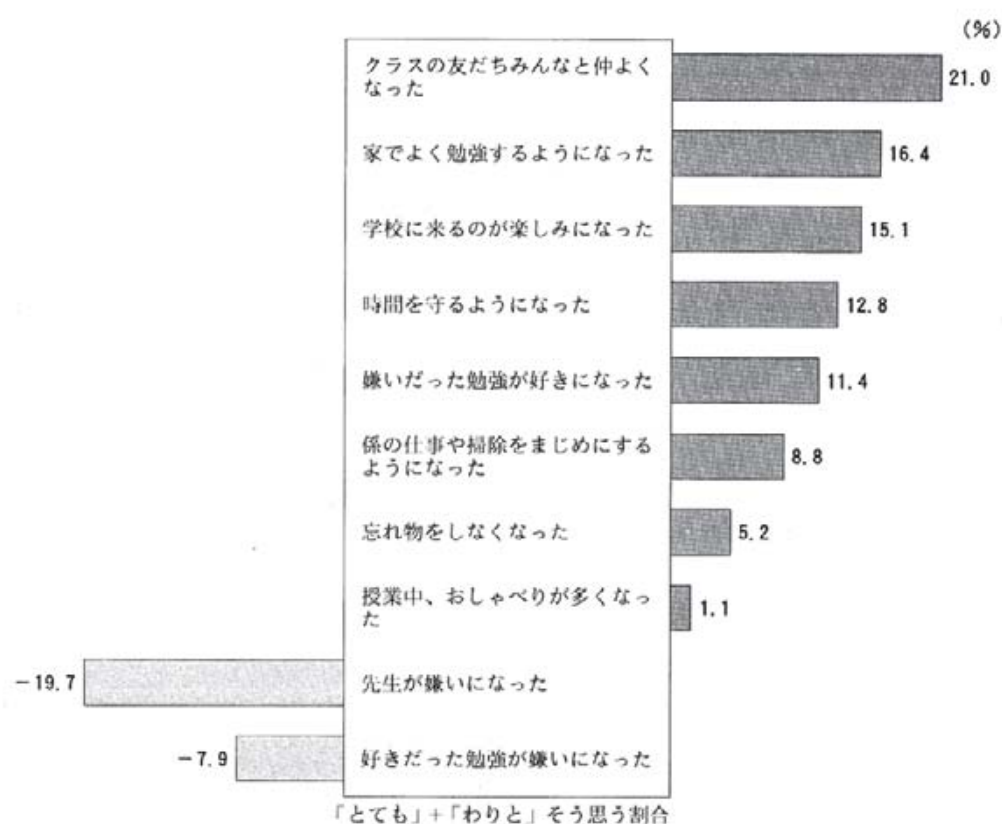
「とても」+「わりと」そう思う割合
*はネガティブな項目

向となる。

図2は満足度60%以上の高い群と満足度30%未満の低い群を比較し、より数値を追ったものである。「クラスの友だちみんなと仲よくなった」「係の仕事や掃除をまじめにするようになった」「学校に来るのが楽しみになった」「時間を守るようになった」「忘れ物をしなくなった」「家でよく勉強するようになった」「嫌いだった勉強が好きになった」とポジティブな変化に影響を与えるのは満足度の高い担任で、逆に、満足度30%未満のクラスの担任は「先生が嫌いになる」ばかりでなく「好きだった勉強も嫌いになる」という変化を引き起こす傾向がある。

をしなくなった」「家でよく勉強するようになった」「嫌いだった勉強が好きになった」とポジティブな変化に影響を与えるのは満足度の高い担任で、逆に、満足度30%未満のクラスの担任は「先生が嫌いになる」ばかりでなく「好きだった勉強も嫌いになる」という変化を引き起こす傾向がある。

図2 今の担任になって自分が変わったと思うこと × 担任への満足群
(満足度60%以上のクラス群－30%未満のクラス群)



そうした担任と生徒の関係は、クラスの様子にも大きな影響を与えている。表29によれば、満足度が60%以上の高い群では「体育祭や文化祭などの行事にクラスみんなできりくむ」「チャイムが鳴って先生が来るまでに、席についている人が多い」「先生に『静かにしなさい』と言われたら、すぐ静かになる」

「行事のとき、いろいろな人がクラスの代表になる」「係などの仕事をするとき、係以外の人も協力してくれる」「先生が来なくても掃除をまじめにする人が多い」「放課後、先生とおしゃべりすることが多い」と協力的でけじめのあるクラスイメージを持っている。

表29 クラスの様子 × 担任への満足群

(%)

	担任への満足度			満足度 60%以上— 30%未満
	60%以上	30~60%未満	30%未満	
1. 体育祭や文化祭などの行事にクラスみんなできりくむ	86.4 (47.6)	> 74.4 (37.5)	> 71.0 (33.3)	15.4
2. チャイムが鳴って先生が来るまでに、席についている人が多い	56.8 (10.3)	38.3 (9.6)	47.2 (12.8)	9.6
3. 先生に「静かにしなさい」と言われたら、すぐ静かになる	54.0 (20.4)	42.0 (14.6)	50.1 (19.3)	3.9
4. 行事のとき、いろいろな人がクラスの代表になる	36.3 (9.9)	> 32.7 (9.2)	> 28.5 (6.4)	7.8
5. 係などの仕事をするとき、係以外の人も協力してくれる	35.4 (8.4)	21.8 (4.8)	25.9 (5.8)	9.5
6. 先生が来なくても掃除をまじめにする人が多い	30.8 (5.5)	> 27.7 (5.7)	> 23.6 (6.2)	7.2
7. 放課後、先生とおしゃべりすることが多い	27.8 (8.8)	> 17.6 (3.9)	> 4.7 (1.8)	23.1
8. 先生がいなくても自習課題を静かにやる	23.2 (2.9)	15.8 (3.3)	22.0 (6.8)	1.2
9. 学級活動の話し合いのとき、自分の意見を発表する人が多い	14.5 (4.4)	16.0 (3.0)	10.6 (1.8)	3.9
* 10. 授業が終わるチャイムが鳴ると、すぐ本やノートを片づける人が多い	61.9 (16.8)	60.9 (20.6)	70.1 (23.3)	- 8.2
* 11. 忘れ物をする人が多い	49.8 (14.3)	37.9 (8.7)	45.3 (8.8)	4.5
* 12. 授業中、隣や後ろの人とおしゃべりする人が多い	43.3 (13.9)	62.9 (21.3)	55.9 (14.1)	- 12.6

「とても」+「わりと」そう思う割合
()内は「とても」そう思う割合
*はネガティブな項目

さらに、表30では、他のクラスと比較したクラスイメージを尋ねたところ、担任への満足度の高いクラスは「楽しいクラス」「行事で燃えるクラス」「まとまりのあるクラス」「授業中、みんなが積極的に発表するクラス」と評価し、自分のクラスに対して自信を持っている。逆に満足度30%未満の低いクラ

スでは、生徒たちは自分のクラスに不満を抱いており、担任への満足度はクラスイメージにも影響しているようである。やはり、上位群の先生は下位群の先生に比べ、クラスの生徒から評価も高く、クラス内での人間関係も円滑に行われていることが顕著に示されている。

表30 クラスイメージ × 担任への満足群

(%)

	担任への満足度			満足度 60%以上 30%未満
	60%以上	30~60%未満	30%未満	
1. 元気のあるクラス	79.1 (49.3)	76.8 (52.7)	76.4 (39.6)	2.7
2. 楽しいクラス	77.8 (40.1)	74.4 (40.8)	69.2 (29.9)	8.6
3. 行事で燃えるクラス	73.9 (39.7)	63.9 (33.9)	53.3 (28.5)	20.6
4. 男女の仲のよいクラス	51.5 (16.2)	47.6 (12.5)	51.3 (20.0)	0.2
5. まとまりのあるクラス	44.5 (12.1)	38.1 (8.6)	34.6 (10.4)	9.9
6. よく勉強するクラス	29.5 (8.0)	26.5 (6.3)	21.7 (2.6)	7.8
7. 授業中、みんなが積極的に発表するクラス	28.1 (5.5)	21.5 (4.8)	13.0 (2.0)	15.1
8. クラスの約束を守るクラス	29.3 (5.1)	30.5 (2.7)	28.1 (3.5)	1.2

「とても」+「わりと」そう思う割合
()内は「とても」そう思う割合

表31は、担任への信頼の差を満足群別にみたものである。満足度60%以上の高いクラスは「勉強の仕方がわからないとき」「高校受験など進路について」「成績が下がったとき」など学業成績のことはもちろん、「クラスの友だちとけんかしたとき」「誰かにいじめられたとき」「学校に行きたくなくなった

とき」「家出したくなるほど、親に叱られたとき」「好きな異性ができたとき」など個人的なことまで先生を頼りにし信頼している様子がうかがえる。

このように担任の先生への満足度が担任との接触や担任への信頼、そして学級集団の充足や学校生活に大きな影響を与えていること

表31 担任への信頼 × 担任への満足群

(%)

	担任への満足度			満足度 60%以上- 30%未満
	60%以上	30~60%未満	30%未満	
1. 勉強の仕方がわからないとき	80.8 (21.5)	> 56.8 (11.2)	> 36.8 (3.3)	44.0
2. 高校受験など進路について	79.7 (33.2)	> 77.5 (37.8)	> 51.8 (10.2)	27.9
3. 成績が下がったとき	67.2 (14.2)	> 52.5 (13.5)	> 39.6 (5.3)	27.6
4. 誰かにいじめられたとき	54.4 (18.5)	> 40.6 (14.3)	> 30.2 (6.2)	24.2
5. クラスの友だちとけんかしたとき	52.6 (14.1)	> 40.2 (11.6)	> 26.6 (4.1)	26.0
6. 学校に行きたくなくなったとき	51.7 (16.1)	> 40.0 (12.9)	> 27.1 (6.4)	24.6
7. 家出したくなるほど、親に叱られたとき	43.1 (10.8)	> 25.0 (5.1)	> 16.3 (1.4)	26.8
8. 好きな異性ができたとき	20.3 (4.1)	> 11.3 (1.6)	> 7.1 (0.2)	13.2

「とても」+「わりと」頼りになる割合
()内は「とても」頼りになる割合

がわかる。

さらに、図3に示したように「学校に来る楽しみ」にも影響を与えている。しかし、担任への信頼や接触度、担任による自分自身の変化への影響、クラスの様子ほど満足度の高いクラスと低いクラスでの差が顕著ではない。これは中学校が教科担任制であり、担任中心

の学級集団を形成しているが、生徒たちはクラスの友人関係、教科担任や部活動での活躍や顧問の影響など、担任以外のさまざまな背景が「学校の楽しさ」を規定する大きな要因と推測される。

図3 学校に来るのが楽しみか × 担任への満足群

	とても楽しみ	わりと楽しみ	少し楽しみ	あまり楽しみでない	(%) ぜんぜん楽しみでない
満足度60%以上のクラス	20.6	31.2	22.8	16.2	9.2
満足度30%未満のクラス	16.4	31.1	25.7	16.6	10.2